

平成30年6月11日(月)

老球の細道417号

選手の親に対する対処法

会津バスケットボール協会 室井 富仁

先月末ロシアWカップ日本代表の最終メンバーが決定した。西野新監督のもとでロシアWカップを戦うためにどのようなメンバーで戦うのか注目していたが、勢いのある若手の抜擢ではなく、経験と過去の実績を重視した選考となった。聞こえはいいが、悪く言えば年功序列の無難なメンバー構成に終わったのではないか。

スポーツの世界は実力の社会。年齢に関係なく、実力のある者が勝ち残り、そうでない者は敗れ去る。年の功はない。年齢によってアドバンテージを与えられることもない。ところが、小、中、高校生などのスポーツ活動になると、いまだに年功序列を意識する選手、コーチ、親が後を絶たないようだ。

先日ある中体連大会を観戦したら、若手の情熱あるコーチが試合に負けて落胆していた。次の大会でリベンジするよう励ましたら、保護者から3年生を試合にもっと出すようクレームが来ていることを話してくれた。試合は、勝利を目標に、真面目に努力してきた自チームの最高のメンバー編成で戦うことは自明の理である。そこに年功序列は参加できない。

色々なコーチから悩みを聞くと、コーチングで難しいのは選手だけでなく選手の親のほうも難しいという。今回のように選手の起用に露骨に批判したり、時にはコーチの戦術にまで口を出す親もいる。私も現役コーチ時代はたくさん経験し、悩まされた。特に勝てない時は、そのようなことが頻繁に起こる。

コーチにとって選手の親と協働することは仕事の一つである。親もチームの一員であるが、親は親でありコーチではない。コーチもコーチであり親ではない。だから、残念ながらコーチは選手、保護者全員を喜ばせることはできない。親に理解してもらわなければならないことは、プレイタイム、ユニフォームを着てベンチ入りすることは権利ではなく特権であるということ。日々プレイタイムを競う場所はほとんど親の目の届かないところで行われ、それを評価できるのは日々選手を指導するコーチのみであるということも。

メンバー選考、プレイタイムのトラブルを防止するために、私が現役コーチ時代に実践していたことは下記の通りである。

*コーチングフィロソフィーを示し、どのような基準で大会におけるメンバーを選考するかを4月の保護者会で公にする。重要な基準は①実力②努力③学校生活のBIG3。

*部通信において日頃の活動の様子、大会の様子、コーチの考えを発信する。

*親に練習や練習試合を見に来てもらう。親に見てもらうことを避けるコーチもいるが、普段の練習や練習試合を見てもらうことが自分の子どもの状況やコーチの考えなどをより一層理解してもらえる。

*部員が多くて試合になかなか出場できない選手が多いときは、練習試合などでできるだけゲームの時間をたくさん作る。レギュラーチームの休憩時にBチームのゲームを行う。男女共学校であれば、男子Bチームと女子チームのレギュラーと試合させる等。

コーチの神様ジョン・ウッデンは言う。「コーチの多くの仕事の大半は、人格的に成熟していない多くの人々の興奮、感情的な状況下でなされている。そのような中でコーチの仕事をするには哲学的であるべきだ」。コーチはぶれない判断、ぶれない生き方を。